

読み方や書き方をいっぺんに教えてはいけない

子供に漢字を与えるのは、植物に肥料を与えるのによく似ています。肥料を施したからと言ってその場で、その植物がニョキニョキと伸びていくわけではありません。

むしろ、肥料を施したことを忘れた頃になって、その肥料が根から吸収され、いつとはなしにそのききめが現われてくるものです。

漢字もそのように、「教えた。さあ覚えなさい」というわけにはいきません。教えられた漢字が、いつとはなしに頭に刻まれて、読めるようになるのです。

私が、明治以来の“読み書き同時教育”を否定しているのは、そのためです。初めて漢字が出てきたところで、読み方・意味・使い方・書き方をいっぺんに教え、同時にできるように要求する、こんな無理な学習をなぜするのか。私は、このことを考えると、いつも腹の立つ思いです。

ある漢字が“読める”“意味がわかる”“書ける”と言っても、そこには習熟の程度やその期間によって、いくつもの段階があるのです。習熟を重ねるに従い、期間を経るに従って、その質が向上していくのです。どんなに練習したところで、目に見えてすぐに向上するものではありません。

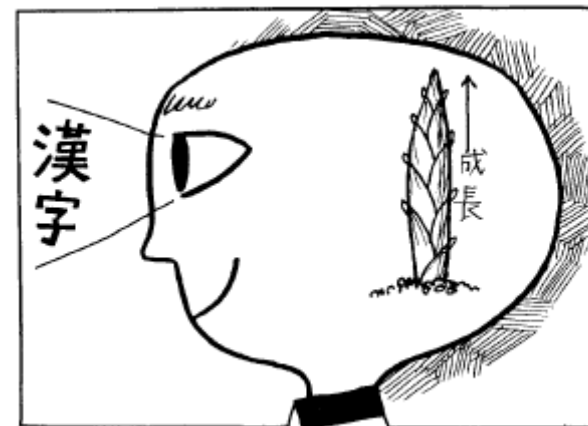
植物の成長する様を観察しますと、絶えず、ずるずると伸びているのではないことがわかります。ひょこん、ひょこんと伸びるのです。変化し

ない時期と飛躍する時期とあるのです。

もっとも、変化しない時期があると言っても、それは外から見えないというだけのことであって、内部では、どんな変化をしているかわかりません。

幼児が漢字を覚えていく様子も、この植物の成長の仕方によく似ています。覚える時には驚くほどいっぺんにたくさんの漢字を覚えます。しかし、ある時期は、覚えるのを休んでいるように見えます、よく覚える時には、頭がよく働いていて、覚えないうちは、頭が休んでいるのでしょうか。決して、そう単純には言えないと私は思います。覚えるのを休んでいる時こそ、整理するために、頭が大活躍しているかもしれないのです。

ともあれ、幼児の漢字を覚える仕事は、機械が物を処理する仕方とは本質的に違っている、という事実を認める必要があります。



漢字を覚えていく様子は植物の成長の仕方に似ている